

産 業

ものづくりの町 福山

現在の「福山」は広島県で2番目に人口が多く、特色ある産業がたくさんあります。これは歴史を通じて育まれてきた「ものづくり」の伝統が脈々と引き継がれてきた結果なのです。

1 「ものづくり」の歴史

江戸時代、福山市がある瀬戸内地域は、各藩によって干拓事業や新田開発・製塩業・殖産事業が進められました。福山藩においても、早くから潮待ちの港として栄えてきた鞆では鍛冶が発達し、刀剣や錨、船釘が多く生産され、現在の鞆鉄鋼団地の基盤を築きました。また、鞆で生まれた保命酒は、藩の保護も受けて全国に広まりました。

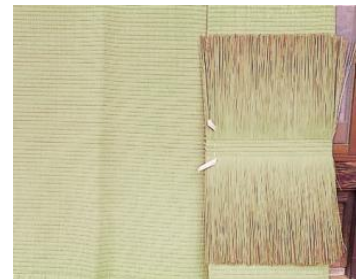
「備後表」として知られるようになる畳表の歴史はさらに古く、16世紀に沼隈でい草の栽培とその生産が行われていた記録があり、江戸時代には藩の奨励により量産されるようになりました。また、干拓によって生まれたこの地域の土壌には塩分が含まれ、多くの農作物は育ちにくい状況にあり、藩主水野勝成はこうした土地に強い綿花の栽培を奨励し、それを原料に作られるようになった縞木綿の生産技術を生かした「備後緋」の生産が始まりました。

松永では、遠浅の海の特徴を生かし、干拓地での塩田作りが進められました。できた塩を北前船と呼ばれた船で様々な地域に送って商売をしました。また、北前船では、塩を運んだ帰りに、船の重しとして木材を積み、持ち帰りました。その木材を使って始められたのが、下駄作りです。葛原勾当などの福山出身の名手の登場によって琴の生産が盛んになり、高い技術によって作られた「福山琴」は、全国に知られるようになりました。

このように、この頃から福山では全国に知られる工業製品が存在し、それが今日まで受け継がれているところに長い「ものづくり」の歴史を見ることができます。

明治期になると、福山では繊維工業が発展しました。初期には製糸業が起こり、地元の資本を集めて、福山駅前に大きな紡績会社がつくられました。大正期になると、その会社は県下最大の職工数（1541人）を誇るまでになりました。新市や芦田では、「備後緋」の大量生産化が進むとともに、縫製業も盛んになり、備後地方一帯は繊維の産地として栄えました。現在でも、この地域一帯は繊維業の町となっています。

大正期から昭和初期にかけては、ゴム製品や削鰹・漁網地・カラメルなどの生産が始ま



〔備後表〕



〔備後緋〕




〔松永下駄〕

りました。日中戦争が始まると、工場は戦争に必要なものの生産（軍需）への転換を迫られ、紡績会社の工場は航空機、縫製業者の工場は軍服の生産を行う軍需工場に転用されました。

終戦から1955年（昭和30年）頃にかけては、各工場が軍需工場からもとの生産活動に戻され、工業生産の回復が図られました。この時期には、衣服・家具・ゴム製品・一般機械・金属の生産が伸びましたが、これまでの地場産業中心のものづくりが進められていました。

1950年代から、福山では一層の工業化を図るために、大企業の誘致に乗り出しました。1961年（昭和36年）、福山市に日本鋼管（株）福山製鉄所〔現JFEスチール（株）西日本製鉄所（福山地区）〕の進出が決定し、日本最大級の鉄鋼コンビナートが誕生しました。1963年（昭和38年）には、備後工業整備特別地域の指定を受け、工業化への道を突き進むことになりました。

鉄鋼の生産が始まると関連の会社が次々と進出し、働き手となる人たちも増えていきました。さらに、人口が増え、交通網も整備され、病院や大型商店などが増えるなど、都市化が進んでいきました。



日本鋼管進出の決め手は、埋め立てをすることにより得られる広大な工場用地と、工業になくてはならないものが豊富にあったからだそうだよ。

現在の福山には、「備後緋」から栄えた繊維業や「松永下駄」から栄えた木工業、食品業などの軽工業の他、日本の基幹産業を支える鉄鋼業や機械工業、化学工業、さらには電子部品などのハイテク産業など、多種多様なものを作り出す工場がたくさんできました。また、それぞれの業種の特性や福山市の地形などから、臨海地域だけでなく、福山市北部へも工業団地ができるなど、福山全体が「ものづくりの町」として発展を続けています。



〔箕島地区工業団地（箕沖町）〕



〔福山テクノ工業団地（箕島町）〕



〔福山北産業団地（駅家町・加茂町）〕

備後緋や備後表等のものづくりの伝統が脈々とつながって、今の工業団地などを中心とした「ものづくりの町 福山」を築きあげてきたんだね。



環境イメージ
キャラクター
くわいちゃん

2 福山の伝統工芸

(1) 福山^{こと}琴

福山琴は全国の琴の生産量の約70%を^し占め、楽器として初めて「伝統的工芸品」に指定されました。木目や装飾の美しさが特徴的^{もくめ そうしよく とくちょう}で、音色も優^{ねいろ}れ、手作りの良さがあふれる、福山の代表的な工芸品です。

福山での琴作りは、江戸時代の初め^{ごろ}頃から始められました。江戸時代の終わりには琴の名手「葛原勾当」が現れ、福山の琴作りが盛んになり、製作技術も高まっていきました。

その後、1970年代の終わり頃になると、琴を買う人や、琴作りを受け継ぐ人も減少しました。そのような中で、1985年（昭和60年）には楽

器としては初めて「伝統的工芸品」に選ばれました。琴を演奏する人が増え、福山の琴がさらに発展するようにと、毎年、全国小中学校「^{そうきょく}箏曲コンクール」や「ふくやま琴まつり」がリーデンローズで開催されています。



〔全国小中学校箏曲コンクール〕

切り取った材料を、1年から3年かけて^{てんねんかんそう}天然乾燥させる



乾燥した材料を、琴の形に整える



〔琴作りの様子〕

ふるさと豆知識

宇宙^{ひび}に響いた福山琴の音色

2010年（平成22年）4月に打ち上げられたスペースシャトル「ディスカバリー」。その船内で、日本人宇宙飛行士の山崎直子^{やまざきなおこ}さんによって、福山琴が演奏されました。

シャトルの限られたスペースに積めるように、通常の5分の1ほどの長さ35cm、幅^{はば}13cmのミニチュアサイズで作られた琴です。小さい頃から琴を習っていた山崎さんは、「宇宙で琴を演奏してみたい。」という夢を、福山琴によって実現したのです。



(2) 備後びんごがすり 紺

備後紺は、福岡の久留米紺、愛媛の伊予紺とともに、日本三大紺のひとつで、「広島県指定伝統工芸品」にも登録されています。

1828年(文政11年)に芦田郡有磨村(現在の福山市芦田町)に生まれた富田久三郎は、紺地に白の模様を入れるため、木綿の糸の一部を糸でしばって染め、木綿の「井桁紺」を作ることになりました。肌触りがよく、汗をよく吸い、じょうぶで長持ちするこの紺は、「備後紺」と名付けられ、着物や作業着などに広く愛用され、全国で売られるようになりました。

1877年(明治10年)頃には、新市町や芦田町でますます盛んに作られるようになり、備後地方の特産品となりました。

1959年(昭和34年)頃には全国の紺生産量の約70%を備後紺が占めるまでになりました。

備後紺は、完成までに20以上の作業があります。特徴的な色や模様を出すには、木綿糸を束ねたものを、何か所も糸でくくった状態で藍染をします。そうすることによって、くくった部分が藍色に染まらず白いまままで残ります。その糸の白い部分を組み合わせることで、様々な模様を生み出すことができるのです。

昔は、それらのすべての工程を職人たちの手作業で行っていましたが、現在は機械による生産がほとんどです。

今では、生産は少なくなりましたが、「備後紺」に愛着を持つ人も多く、

備後紺の伝統を未来へ伝えていくために、紺を使った新しい商品の開発を行ったり、販売会を行ったりして、多くの人に備後紺を知ってもらい、活用してもらう活動が行われています。新市町にある「しんいち歴史民俗博物館」では、備後紺の歴史が紹介されたり、藍染の体験ができたりするなど、地域の伝統工芸を受け継いでいくための取組が行われています。



〔備後紺〕



富田久三郎



〔備後紺の模様〕

(3) 下駄げた

松永町では、昔から下駄づくりが行われてきました。今では、松永は「はきものまち」と呼ばれています。

明治時代、松永の下駄屋まるやまもすけの丸山茂助きりは、桐に似た安い「アブラギ」という木材を使って下駄を作りました。この下駄は、安くてじょうぶであったため、やがて全国に広まりました。

1907年(明治40年)頃ごろには、全国に先がけて下駄製造の機械化が行われ、大量生産ができるようになりました。こうして、松永は「下駄のまち」として大きく発展しました。

最近では、高級な下駄が人気で、特に夏は祭事用として若い人にも好評です。また、下駄は健康に良い履物として見直され、贈り物としても人気になっています。現在も全国の50%にあたる年間80万足の下駄が生産されています。

松永の下駄は、1939年(昭和14年)に全ての作業を機械化しました。その時から現在まで、同じ方法で作られています。



〔松永下駄〕



丸山茂助

機械を使って下駄の形に切り分ける



表面をみがいてきれいにする



〔下駄作りの様子〕

広島県はきもの協同組合の人の話



下駄には木のあたたかさや温もりぬくがあります。製造方法は昔から変わっていません。松永下駄の伝統と心は製造者によって、守られています。毎年秋に開催かいさいされている、ゲタリンピックも、大変盛り上がっています。



〔ゲタリンピック〕

(4) 備後表

備後表は、古くから作られ続けている、上質のい草を使った畳表です。年月が経つにつれて黄金色に変わり、より艶が出てくるそうです。

備後表は、室町時代の終わりに、現在の沼隈町でい草を栽培して織ったのが始まりです。生産には難しい技術が必要だったのですが、今から400年ほど前、沼隈郡山南村（現在の福山市沼隈町山



〔備後表〕

南)の菅野に住む長谷川新右衛門が研究を重ね、畳表の中央で短い草をつなぐ「中つぎ表」を発明しました。これによって、畳表の生産量は大変増えました。この畳表は、「備後表」として、備後の国の特産物となっていました。



〔い草〕

しかし、現在では備後地方のい草の生産量が減少しているため、熊本県など他県のい草を使って生産している備後表もあります。この熊本県のい草は、多くの備後のい草の栽培者が、方法を教えたことから始まっています。

い草は、12月から6月にかけて栽培され、7月には刈り取りを行います。そして、その後「泥染め」を行います。この泥染めによって、畳表独特の優雅な香りになり、また色合いも美しくなります。次に、い草を均一に乾燥させ、熟練された技術によって畳表が織られます。

現在、い草製品工芸士は3人だけですが、「畳が減る中で、少しでもい草の良さを感じて欲しい。」との思いをもって、備後い草を使った製品を未来へ伝えるための活動を行っています。

いぐさ生産者組合連絡協議会の人のお話

いぐさに携わって50年になりますが、い草栽培は、“毎年1年生である”と言われるくらい難しいです。気温差や水の管理、肥料の量、刈取りの時期などとても気を使う作物です。“てん”と呼ばれる赤い斑点がでれば、い草の価値は下がってしまいます。

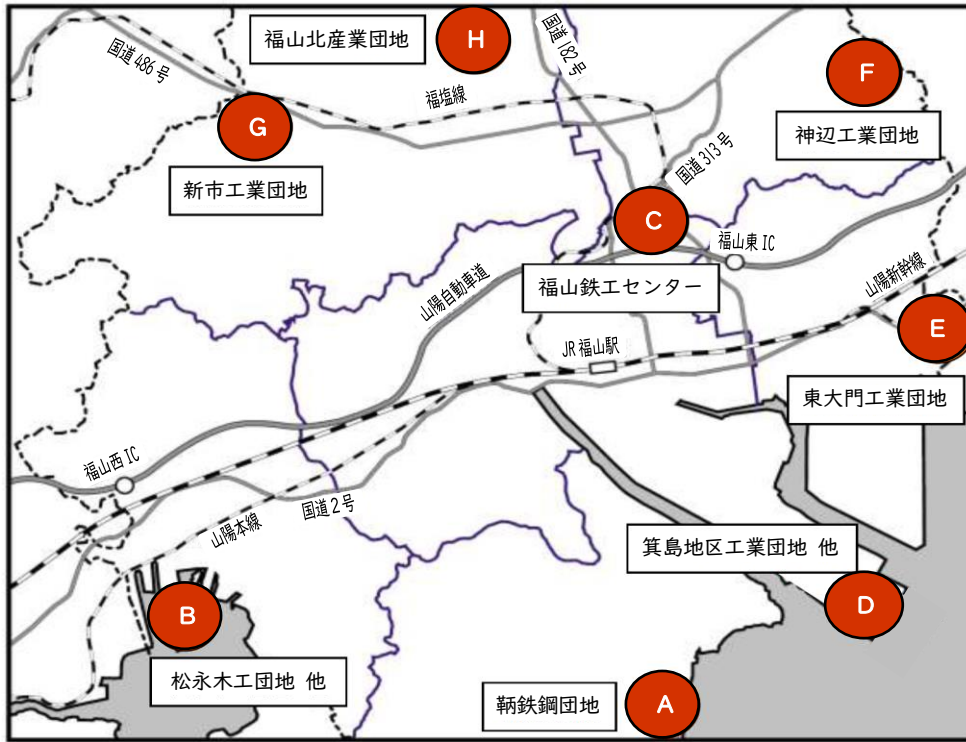
作業は、寒い時期に植えて、暑い時期に刈取るため大変ですが、刈取りが終わった時は、ほっとします。今、い草の生産量は減っていますが、「備後表」の品質は多くの人に認められています。日本を代表する文化の一つである、黄金色に輝く備後表をぜひ、若い世代に伝えていきたいと思っています。

全国に誇る福山の伝統工芸は、先人やわたしたちの生活はどのように変えたんだろう。

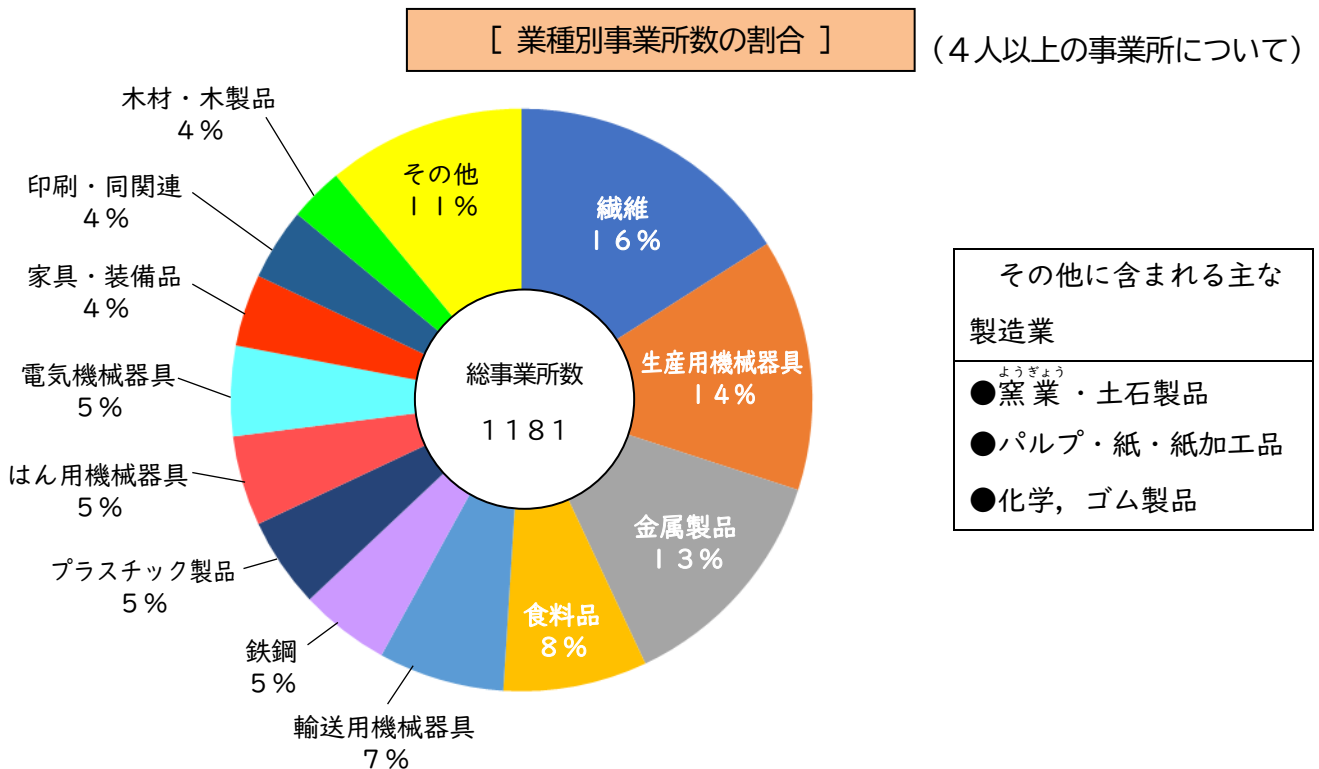


3 福山の工業

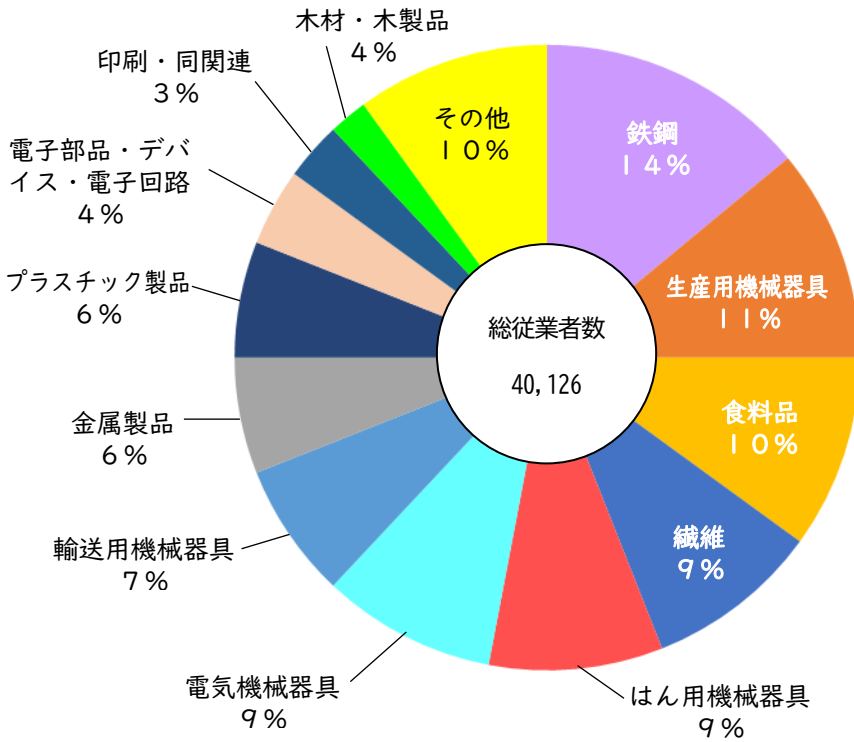
(1) 主な工業団地の分布



(2) 製造業の様子 (統計ふくやま 2019 年度版より)



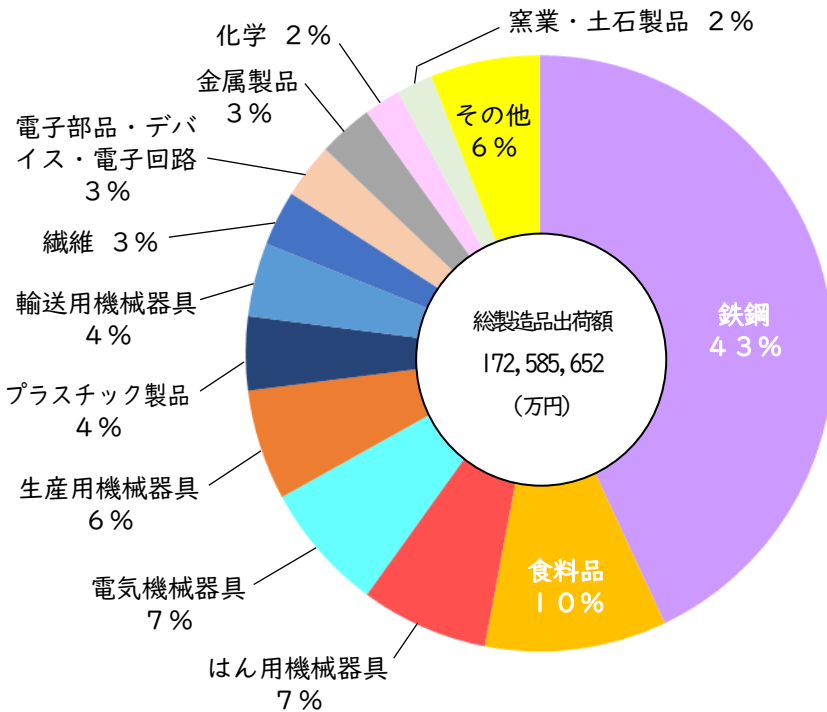
[業種別従業者数の割合]



その他に含まれる主な製造業

- 窯業・土石製品
- 家具・装備品
- 化学

[業種別製造品出荷額の割合]



その他に含まれる主な製造業

- 木材・木製品
- ゴム製品
- 印刷・同関連

[全国での位置づけ]

全国1728の市区町村の中で	事業所数	13位
	従業者数	21位
	製造品出荷額等	25位

2018年(平成30年)工業統計表(経済産業省)より